

---

# 春の巡りに

橘高 有紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春の巡りに

### 【コード】

N6080T

### 【作者名】

橘高 有紀

### 【あらすじ】

祖母が大切にしていた花梨は、小さく可愛らしく、健気な少女のような木だった。

春がきたよ。

寒いさむい冬を越えて、温かな春が。

花の咲く、季節がきたよ。

「この木って何の木。葉っぱばかりでさ」

花梨かりんだよ、と祖母が言った。祖母の家にあつた大きな花梨から接ぎ木されたのがこれだ。まだ小さくて、いつ枯れるんじゃないかと窓の外をぼんやり見ていた。寒い冬さえ乗り越えられないんじゃないかといか。

祖父が他界し、一人きりになつた祖母が引つ越してきたのは、その年の春だった。ろくな荷物も持たずにやってきた祖母が、唯一宝物のように連れてきたのが、この若木だ。

何でも、昔むかし祖父と冗談半分で種を庭に植えたらしい。それが予想外によきによき育つて、毎年手のひらより大きな実を、これでもかと思ついたらしい。その木には覚えがあつた。冬枯れした庭の中で、一際目立つ黄色の実を馬鹿みたいにくつつけていたから。

「でもばーちゃん。こいつ元気ないよ」

葉の数が少なく、根も十分に伸びていない。土地に馴染んでないのだ。

そうだねえ、肥料はあげてるんだけどねえ、と祖母は苦笑していった。

「この子はねえ、綺麗な綺麗な可愛らしい花を咲かせるんだよ。花梨の実は薬にもなるし、よく花梨酒を作つてね。この子が実を付けたら、またつけてみようねえ」

一年が過ぎて、二年目、小さな花がぽつんと咲いていた。ピンクの小さな花だ。貧相な木相応に小さくて弱々しいが、一つ、二つ、

三つ。

嬉しくて、祖母のところへ飛んでいった。花！花咲いたよ、ばーちゃん！ねえ来て！ねえ！祖母が目を細くして窓際に駆け寄った。まるで小さな女の子のような花が、一生懸命咲いてくれたのだった。「えらいねえ」と、我がことのように祖母は喜んだ。

「かわいいでしょう。おばあちゃんの言ったとおりだったでしょう」それから毎年春になると、花梨は華奢な花を咲かせた。しかし、実をつけることは五年が過ぎてもなかった。

ここは、都会ではないけど田舎とも呼べない半端な住宅地だ。木を育てるほどのスペースがない。花梨は、育ちたい育ちたいと空に向かって枝葉を伸ばすけど、お隣さんにかかつては迷惑だからと、冬に剪定されてしまう。

五年が経ってもその木は、うちへ運ばれてきたころと何ら変わらず、小さなまま。

それでも祖母は、木の世話をせつせと行った。虫がつかないよう病気にならないよう……まるで、孫でも可愛がるように話しかけては微笑んだ。

「元気かい？青々と葉を茂らせて、綺麗だねえ」

「ごめんねえ。ちよつと切らせて貰うからねえ」

「今年も可愛い花が咲いたねえ」

いつしか小さな木への興味は失せ、存在さえ忘れていたように思う。

そして七年目、花梨はようやく小さな実を一つだけ実らせた。葉の間に偶然それを見つけ、妙に浮かれて祖母を引つ張った。祖母は嬉しそうに微笑んで、「がんばったね」と実を撫でた。

そして祖母は、その年の冬静かに息を引き取った。花梨の実が熟したら酒にしたりジャムにできると教えてくれたのに、何一つできないまま、永遠に瞼を閉じてしまったのだ。

夜、わんわんと泣く声が聞こえた。

家族のすすり泣く声かと思った。通夜も葬式も決して泣かなかつた家族の、誰が泣いているのかと。だが、違った。

「おばあちゃん、おばあちゃん。どうして逝ってしまったの。もう少し待っててねって言ったのに。絶対実をつけるからねって言ったのに。おばあちゃん。おばあちゃん……。やだよう、逝かないでよ」

祖母の遺骨の前で泣いてたのは、ワンピース姿の小さな少女だった。手足のほっそりしたその子に見覚えは全くなかった。甘い香りを漂わせながら、何度もおばあちゃんと呼んでいた。長い髪に見覚えのある小さな花の飾りをつけていた。ピンクの華奢な花の。

ああ……。あれは、うちの花梨だ。

何の根拠もなかったが、祖母の宝物だった花梨だって悲しむに違いなかった。ぼきんと折れてしまいうような華奢な花梨を、甲斐甲斐しく世話していたのは祖母だったのだから。

「頑張ったねって撫でてくれたよね。私、頑張ったでしょう。肝心のおばあちゃんがいてくれなきゃ、実なんてつけても意味ないのにおばあちゃんが世話してくれたから、頑張れたのに」

誰も祖母の死を悼んで泣かなかつたのに、花梨だけは辺りはばからず大泣きしていた。冴え冴えとした夜にその声はよく響いた。しかし誰も気づかない。これほどの大声なのに、家族の誰も座敷へ降りてこない。だからだろう。座敷の戸口で、耐えきれずうずくまっていた。泣けなかつた涙が、後から後から溢れた。

きよとんとして、飛び上がったのは花梨だった。声にならない悲鳴を上げた。

「み！ み、みみみみみ見つかって……」

真っ青になって、こけつまろびつ逃げ出したその背に呼びかけた。「花梨。実をつけるよ。意味ないなんてことはないよ。そのほうが、ばーちゃんも喜ぶから」

祖母のように上手く活用してやれないかもしれない。だけど、一

生懸命つけてくれた実を大切にしたかった。あわわわわ、と窓枠に足をかけた少女は、びくりと身体を震わせた。恐る恐る振り返ったその顔は、何を見いだしたのか。一度だけ、こくと頷いた。

夢うつつの出来事に確信が持てないまま、朝が訪れた。

思えば祖母は花梨にしょっちゅう話しかけていたけども、それはあの子に向かって話していたのだろうか。手足の細い、可愛い女の子だった。

「なあ、花梨。お前は来年も花を咲かせて、実をつけるだろ」

リビングから見える細い木に話しかけても、あの子は見えないし返事も無い。それでもいいか、と思う。祖母もこうして話しかけていたのだ。

ぴゅうと木枯らしが吹き、窓を閉めようとしたときだ。ぽとんと黄色の実が落ちた。偶然だったのかもしれない。だけど、くすりと笑って手に取った。

「ありがたく受け取っておくよ。どうしたらいいか調べるからさ」  
独特の匂いを放つ花梨の実は、祖母の家にあった木の半分の大きさがなかった。

だが、精一杯作ってくれたものなのだ。

「じきに春が来るよ」

まずは祖母が自慢した可憐で小さな花を咲かせて。祖母が愛した実をつけて欲しかった。その場所は窮屈で、空にはまったく届かないけども、枯れることなく来年も再来年も、どうかそこに。そのままに。

祖母の思いとともに、思い出とともに。

調べて知った花梨の花言葉は、『唯一の恋』と『努力』だった。  
ああ、なるほどと思った。

(後書き)

SS習作です。ちょっとボリュームが出てしまい反省。  
読んで下さってありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6080t/>

---

春の巡りに

2011年8月26日03時27分発行